

配置薬に使用される生薬の特徴⑨

村上 守一

ニンジン(人参)

Panax ginseng C. A. Meyer (ウコギ科 *Araliaceae*)

人参の名称は『本草綱目』(明代)にその根が人間の形体をし、徐々に効力を現すから人蔘の名が与えられ、画数が多いことから参の字を当てるようになったことが記されています。朝鮮人参、高麗人参の名は満州から朝鮮半島の原産であるところから、英名のアジアティックギンセンはアジア産と中国名の発音から、属学名のパナックスは万病薬を意味しています。

『神農本草経』(漢代)の上品に収載され、かなり古くから用いられたことは確かです。この植物が描かれている本草書は宋代の「経史証類大観本草」(1108)の潞州人参です。潞州は現在の山西省長治県の上党郡にあたり、「証類本草」(1108)には上党産の人参が最上品であると記されています。現在ではこの地で自生することはなく、野生の人参はわずかに吉林省などで採取され、高価で取引されています。

日本には天平 11 年(739)渤海文王の使者により進上品として渡来したのが最初で、朝鮮からは隋、唐の時代に何度も入った記録があります。渡来品を貯蔵してあったと思われる正倉院には北 122 生薬が野生人参であることが確認されています。慶長 12 年には朝鮮より種子が献上されたことが記されていますが、実際に栽培が始まったのは元禄時代、八代将軍吉宗の時で、人参の輸入に当たっていた対馬藩の宋家に命じ種子、苗を入手し、日光で栽培化を試み成功しています。日光周辺で半官営による栽培が開始され、幕府から種が貸与されたことから人参の頭に御種を付してオタネニンジンという呼名が現在でも植物名として残っています。寛永の頃には栽培地が 46 ヶ村に及んだといわれ、多く生産されたときは清国に輸出されたこともあります。因みに朝鮮での栽培化は江戸末期、中国では明治の始めなってからといわれています。現在ではこの栽培技術が会津、信州、出雲に引き継がれています。



オタネニンジン(果実)



オタネニンジン(花)

植物の特徴

中国東北部、朝鮮半島原産の多年草で、通常1本の茎を60 cm程に直立し、最大5枚(成長に伴って)まで付く葉は倒卵形の5枚の小葉を掌状に広げます。花は5~6月頃、茎頂より長柄を出し、球状、散形に淡緑色の小花を多数付け、7~8月には赤い液果が実ります。

同属の薬用植物にはトチバニンジン(竹節人參)、アメリカニンジン(広東人參)、サンシチニンジン(三七人參)等があります。



アメリカニンジン



サンシチニンジン



トチバニンジン

生 薬

根を秋に収穫し、調製加工します。加工法により大きく4種に大別されます。

紅 参：根を蒸して乾燥したもの。朝鮮産の高麗紅参、日本産の毛付き紅参などがあります。

白 参：表皮を剥いで天日で乾燥したものです。直参、曲参等です。

湯通し：表皮を剥がず、ひげ根を取除き、熱湯に浸漬してから乾燥したもの。

生干し：細い根を原料にする日本古来の加工法。



人参(生薬)

成 分

サポニン：ギンセノシド Ra~h、Ro、マロニルギンセノシド Rb₁、Rb₂、Rc、Rd 等。

薬効および使用法

虚弱体質、筋肉疲労、病中病後、胃腸虚弱、食欲不振、血色不良、冷え性に用いられる他、健胃強壯薬として配合剤に用いられています。また、十全大補湯、小柴胡湯、人参湯、麦門冬湯、六君子湯等多くの漢方処方にも配合されます。